



シンガポール日本人学校 小学部チャンギ校の紹介

ご挨拶

新年度が始まりました。今年度も歴史と伝統あるシンガポール日本人学校の教育の充実のため、全教職員が力を合わせて力強く学校運営を進めていきます。

私は、この度、チャンギ校第11代校長として着任しました松越正純と申します。今年1月、ニューヨーク・タイムズ紙が「2025年に行くべき52か所」の一つに挙げた富山県富山市からやってきました。「コンパクトで歩きやすい街。食べ物おいしく、人々もみな親切」という評価でしたが、まさにシンガポールがそのような国。過去に観光目的で何度か訪れたことがありますが、自分の世界観を変えてくれた思い出のあるこの地で勤務できる喜びを感じています。

遡ること、1912(大正元)年11月。邦人有志によってミドルロード131に日本小学校が開校して以来、シンガポールの地に日本人の子ども達のための教育が脈々と引き継がれています。1966(昭和41)年にはシンガポール政府より私立学校として正式に認可された日本人学校が開校しました。校舎はその後何度か移転を繰り返し、現在のクレメンティに校舎が完成したのが1976(昭和51)年。ウェストコーストに中学部校舎が完成したのが1984(昭和59)年。そして、本校、チャンギ校が完成したのは1995(平成7)年4月のことです。

当初クレメンティ校は1～4年生、チャンギ校は5・6年生の校舎として使われていたようですが、1998(平成10)年4月からは小学部に学区制が敷かれ、現在の3校体制が始まりました。世界中に広がる日本人学校の中でも歴史のある学校の一つとして現在に至っています。そして、3校の中では一番新しい小学部チャンギ校も今年、開校30年目を迎えています。

チャンギ校はシンガポールの東部のUpper Changiにあります。緑豊かな広大な敷地に建ち、チャンギ空港にも近いので、校舎からゆったりと離陸・着陸する航空機が見られます。白い立派な校舎は、広い校庭、観覧席もある体育館、低・高学年別の2つのプール、たくさんの遊具が備わったハッピーラ



松越正純校長



南十字星創刊60周年おめでとうございます！

(左から)松越正純校長、竹下雄貴教諭、吉田まりか教諭、土田昇教諭

ンド、各種複数の特別教室などを含め、充実した施設環境を誇っています。

そういった恵まれた教育環境の下、「豊かな国際感覚をもち 世界の人々とつながろうとする子」の育成を学校教育目標とし、シンガポール日本人学校チャンギ校で学ぶ子は、将来、日本と世界の未来を創っていく子どもたちであると信じています。多様性を理解し、他の人と協働して問題の解決に取り組める人、世界に関心をもち地球規模で未来を考える人に成長して欲しいと強く願っています。

そのために、今年度は重点目標として『「未来を創る」～まなび、あいさつ、けんこうから～』を掲げて進みます。また、日本各地や現地から選ばれた意欲的な教職員が集まり、互いに切磋琢磨して学び合っています。今年度は「仲間と協働的に探究し、より良い自分や集団を創造する子 ～ウェルビーイングな学級経営と共に～」を研究主題とし、全教職員が力を合わせて力強く学校運営を進めていきます。

保護者の皆様、日本人コミュニティー、関係機関の皆様には、ご理解・ご支援をよろしくお願いいたします。

チャンギ校 校長 松越正純



現在のグラウンド側からの校舎の眺め

祝 チャンギ校 開校30周年 おめでとう！

下の写真は、1995年に生まれてすぐのチャンギ校の写真です。

うわあ、真っ白できれいだね！ あれえ？今のチャンギ校となんか違うなあ…。

さあ、どこがちがっているか わかるかな？探してみましょう！



A 手前のフェンス沿いの木がすごく小さいよ。

→そうだね、30年たった今は、校舎と同じくらいの背の高さになっているね。体育館の正面や高学年棟の近くにある「**コインフラワーガーデン**」には全く木が生えていません。

B それから、校庭の様子が全然ちがうよ。

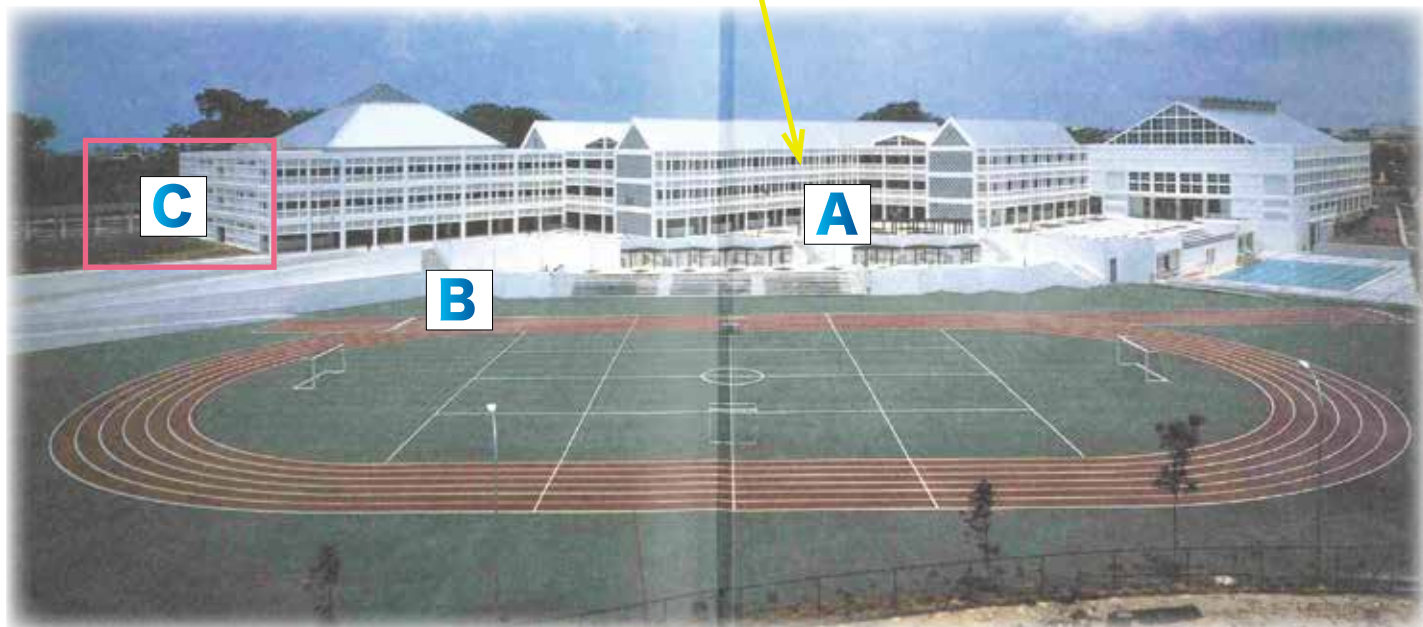
→そうだね、今は全面に芝生が生えているけど、30年前は緑色のやわらかいゴムがはってあったんだって。そして、真ん中には茶色のトラックが描いてありました。

C それから…何か校舎が短い気がします。

→よく、気が付いたね！完成した時は、中央やや左にあるピラミッドのような屋根のエントランスホールの右側、高学年棟の2棟と体育館、プール(高学年)しかありませんでした。

・ええっ？教室が足りないんじゃないの？

→そうなんです。開校して3年間は、5・6年生の高学年だけがチャンギ校に通っていました。1～4年生はクレメンティ校に残ったんですね。4年目からは、エントランスホールに入って右手に低学年棟が完成したので、現在のように、住んでいる場所でチャンギとクレメンティに通う子どもたちを分けられるようになりました。



シンガポール日本人学校チャンギ校 「Coin Flower Garden」

シンガポール日本人学校チャンギ校敷地内には、「Coin Flower Garden(コインフラワーガーデン)」と呼ばれる一角があります。その名のごとくシンガポールドル硬貨(旧硬貨)に記されている植物の花壇で、平成21年度に、保護者からなる「花いっぱいボランティア」の皆さんによって植えられ、今日まで様々な方々のお世話によって維持管理されてきています。



1ドルコイン

ペリウインクル

しかしながら、チャンギ校の「Coin Flower Garden(コインフラワーガーデン)」は、今もお児童や関係者に愛され、今日もきれいな花を咲かせています。



5セントコイン

モンテスラ

そういえば日本の硬貨にも、500円硬貨→桐、100円硬貨→桜、50円硬貨→菊、5円硬貨→稲穂、1円硬貨→若木、と植物が描かれています。他国のコインを調べてみても、植物デザインは決して多くはなく、日本とシンガポールのおもしろい共通点とも言えますね。



50セントコイン

イエローアラマンダ

チャンギ校へご来校の際は、どうぞ
「Coin Flower Garden」をご覧ください。
1階の6年生教室前にあります。



10セントコイン

スタージャスミン

もっとも2013年からは新硬貨が流通し始め、新硬貨には、1ドルコイン→マーライオン、50セントコイン→シンガポール港、20セントコイン→チャンギ空港、10セントコイン→HDB、5セント硬貨→エスプラネード・シアターズ・オン・ザ・ベイ…と、国内の名所や建築物が描かれており、花がついた旧コインにお目にかかる機会は減ってきました。



20セントコイン

パウダーパフプラント



植物に水やりをする生徒と吉田まりか教諭
Coin Flower Gardenにて



コインフラワーガーデンの20年前の姿
23名の保護者様のボランティアにより、この場所が始まりました。

チョウと子どもたちの出会いの庭 「Butterfly Garden」

南国シンガポールは、豊かな自然に囲まれ、多くの動植物が生息しています。しかし、都市化の進行や、自然保護の目的で定期的に殺虫剤が散布されることなどの影響により、かつては身近だったチョウの姿も、年々少なくなってきました。

30年前の開校時には、自然とのふれあいや命の尊さを子どもたちが学べる場所を作ろうとし、「Butterfly Garden (バタフライガーデン)」の整備プロジェクトが始まりました。これは理科の授業の一環として、子どもたちが実際に植物を育てながら、チョウの生態や自然との共生について学ぶことを企図してつくられたものです。かつて進められたこのプロジェクトには、シンガポールの人気スポット「セントーサ・バタフライパーク」のKeii Tanさんにチョウの専門家としての豊富な知識をもとに、チョウが集まりやすくなる植物の選定や育て方を教えていただきました。

子どもたちが心をこめてつくる 自然の楽園



Butterfly Gardenに植えられた植物の中には、チョウの生態に深く関わる種類がたくさんあります。たとえば、クラウンフラワーなどは、チョウの幼虫にとって重要な「食草」として知られており、これらの葉を食べながら幼虫たちはすくすくと育っていきます。中でも、カバマダラやアサヒカズラなど、花の蜜を吸いに来る成虫のチョウにとっても大切な植物です。こうした植物を通して、子どもたちはチョウの一生や命の循環について、自然に学んでいきます。

さらに、園内にはイソクラ、スパイダーリリー、ブーゲンビリアといった南国ならではの鮮やかな花々も植えられており、季節ごとに違った表情を見せてくれます。植物の香りや色、触れたときの感触など、五感を使って自然と向き合う体験が、子どもたちの心を豊かに育んでいます。

今回ご紹介した植物や取り組みは、Butterfly Gardenのほんの一部にすぎません。校内には他にもさまざまな種類の植物が植えられており、毎日のように新しい発見があります。花に集まるチョウや小さな昆虫たちの姿に目を輝かせる子どもたちの笑顔が、このガーデンのなよりの魅力です。「Butterfly Garden」は、単なる植物園ではなく、子どもたち自身が関わり、成長しながら作り上げる“学びの場”です。



チョウを探す生徒と竹下雄貴教諭
Butterfly Gardenにて

自然の中で生き物とふれあい、命のつながりを感じることで、子どもたちは教科書では学べない大切なことを、日々吸収しています。これからも、この美しい庭が多くのチョウたちと、未来を担う子どもたちの笑顔であふれる場所であり続けることを願っています。



チョウと植物、そして子どもたち。それぞれが響き合いながら生まれるこの空間は、小さな気づきや感動にあふれています。ガーデンを訪れるたびに、子どもたちは新しい命の営みに出会い、自分の手で触れながらその不思議さや美しさに心を動かされます。日々の学びの中で育まれる優しさや好奇心が、ここ「Butterfly Garden」でさらに深まり、自然と共に生きる感性を育てていくことを願っています。

文責・画像：
シンガポール日本人学校小学部チャンギ校教諭
土田 昇、吉田まりか、竹下雄貴